

大学院リクルーティングにおける模擬講義の活用

—名古屋大学「名大巡講」の試み—

Exploiting Visiting Lectures to Best Advantage

in International Student Recruitment to

Graduate School:

Nagoya University *Meidai Junko* as an Example

名古屋大学国際教育交流センター／国際言語文化研究科 伊東 章子

ITO Akiko

(International Education and Exchange Center/

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University)

キーワード：大学院留学、模擬講義、外国人留学生獲得戦略

1. はじめに：近年の我が国における大学院留学生の推移

日本学生支援機構（以下 JASSO）が毎年実施している外国人留学生在籍状況調査によると、平成 27 年度に最も留学生数の多い在学段階は学部で、次いで日本語教育機関、大学院の順だった。表 1 にこれら 在学段階の過去 6 年間の在籍数をまとめた¹。

それまで順調に増加していた学部と日本語教育機関で学ぶ留学生数が減少に転じたのは平成 23 年度で、東日本大震災の影響があったと判断できる。これに対して大学院留学生数には震災の影響だと断定できる減少はなく、過去 6 年間大きな変動を見せていない。強いて言うならば、平成 27 年度の伸び率にこれまでよりも力強さがみられる。日本語教育機関は平成 23 年度、24 年度と在籍数を減らした

¹ 日本学生支援機構外国人留学生在籍状況調査

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html（2016年5月25日閲覧）

平成 22 年度から平成 25 年度は外国人留学生在籍状況調査結果と日本語教育機関における留学生受け入れ状況より抜粋。平成 26 年度、平成 27 年度は外国人留学生在籍状況調査結果より抜粋。

表1：大学院、学部、日本語教育機関における留学生在籍数と留学生総数の推移

在学段階	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
大学院	39,097	39,749	39,641	39,567	39,979	41,396
学部	70,021	68,901	69,274	67,437	65,865	67,472
日本語教育機関	33,266	25,622	24,092	32,626	44,970	56,317
留学生総数 ²	175,040	163,697	161,848	168,145	184,155	208,379

後、平成25年度には一転回復を見せ、その後急速な伸びを見せている。過去2年連続で留学生総数が過去最高を更新したのは、日本語教育機関に拠るところが大きいことが分かる。一方の学部留学生数は日本語教育機関在籍数とは対照的に、未だ回復基調に乗ることができていない。

表1が示すように、在学段階別の留学生数の推移はそれぞれが異なった軌跡を示している。また留学生総数の推移とも必ずしも一致していない。「留学生30万人計画」のもとで留学生受け入れ拡大や日本留学の推進を論じようとする場合、どうしても留学生総数に目を奪われやすい。しかし総論を議論するためにはまずは各々の在学段階に関する考察が不可欠であり、その上でそれを「留学生30万人計画」が推進する国家レベルの、いわゆる「オールジャパン」の施策と連動させる道筋の構築が求められるはずである。留学生獲得戦略についても近年広報活動やリクルーティングについて様々な観点から活発な議論が行われているが、ここでも世界的な留学需要の変化に即した在学段階ごとの個別の分析が求められるだろう。そのうえで各在学段階に進学を希望する留学志願者に的を絞り、より訴求力の高いアプローチを考えることが重要である³。

次に表1と同時期の名古屋大学の留学生数の推移を大学院生、学部生、学部研究生別にみてみよう。

表2. 名古屋大学における学部生、大学院生、学部研究生別留学生数の推移（各年11月1日付）

	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
学部生	160	222	270	302	330	315
大学院生	1,033	1,119	1,103	1,084	1,050	1,060
学部研究生	282	229	216	199	216	190
留学生総数	1,915	1,915	2,065	2,038	2,079	(2,137)

² 平成26年度以降の留学生総数には日本語教育機関に在籍する留学生の数が含まれているが、それ以前の留学生総数は在学段階・大学院、学部、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）、準備教育課程の在籍者のみの合計数で、日本語教育機関在籍者は除外されていた。表1では比較のため、平成22年度から平成25年度の留学生総数にも日本語教育機関在籍者を加えて計算している。

³ このような在学段階に着目した考察の一例として、ライアン、袴田（2015）は国立大学の博士課程に在籍する留学生に特化した受け入れから在学支援のありかたを議論している。

*学部を持たない独立大学院の大学院研究生も、学部研究生に含めカウントした。また研究生数には特別聴講生は含まれていない。平成27年度の留学生総数は参考値である。

名古屋大学の場合、平成23年度に開始したいわゆるグローバル30の学部プログラムによって、この間学部留学生の総数は倍増した。しかし、学部プログラム開始から5年が経過し、学年進行が終了した平成27年度以降は、学部留学生の大きな積み増しはもう期待できないと考えられる。一方、全留学生の半数以上を占める大学院留学生については⁴、表1のJASSOの統計と同様に、この間大きく減りもしないが増えもしない状況が続いている。問題は学部研究生の推移で、平成22年度をピークに約3割近くも減少している⁵。学部研究生は1,2年後には大学院へ進学する、いわば大学院留学生の予備軍であると考えられることから、今後学部研究生から時間差をおいて大学院留学生数も減り続けることが十分予測される。事実、表2には示さなかったが、博士前期課程および修士課程1年次に在籍する留学生数は平成25年度から逡減している。

このような状況を踏まえ、名古屋大学では危機感を持ってこれまでのリクルーティング活動の評価、見直しを行った。そしてその結果、留学生獲得の新たな戦略の一つとして研究生を含めた大学院進学希望者をターゲットにした全学的な活動を展開することとなった。折しも名古屋大学は国際競争力の強化に取り組むトップグローバル大学に選出され、平成32年(2020年)までに留学生の受け入れ数を3,000名にまで増やすことを目標として掲げることとなった。この目標達成のためにも各大学院研究科で、いかに留学生の受け入れを拡大し、大学院留学生数を増加できるかが大きな鍵となるのは明らかである。その一方でこれまでの名古屋大学では大学院のリクルーティングについては全学的な手立てがほとんどなされておらず、グローバル30大学院プログラムのような一部の事例を除いては、事実上各研究科の努力に一任されていた。この背景には全学的にある程度統一したルールで実施される学部入試とは異なり、大学院入試は部局(研究科)の裁量によって実施されているという事情がある。そのためこれまでは入試に関する権限も裁量も持たない国際交流・国際教育部署が、リクルーティングというサポートであるにせよ、部局マターである大学院入試に関わる活動を展開するのが憚られた

⁴ 大学院留学生の受け入れに関しては、国立大学と私立大学の間で大きな偏りがみられる。JASSOの平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果によれば、大学院留学生の61.7%が国立大学に在籍し、私立大学に在籍する大学院留学生は33.9%である。これに対して学部留学生全体の81.1%を私立大学が受け入れており、国立大学の学部で学ぶ留学生はわずか16.3%に過ぎない(公立大学に在籍する大学院留学生と学部留学生はそれぞれ全体の4.4%と2.6%である)。

⁵ 本稿では紙幅の都合上詳細に論じることができないが、これまで大学院進学を希望する留学生の第一の受け皿として機能してきた研究生制度が、世界の留学生獲得競争が熾烈化する中でいかに存続していくのかは、これ自体で大変興味深い問題である。名古屋大学国際教育交流センターでは昨年度よりワーキンググループを設置し研究制度と大学院入試制度改革を議論している。議論の一部は留学生教育学会第50回年次大会にて報告を行った(伊東章子ほか「近年の研究生に関する留学需要の変動と、それに対応する研究生制度改革の検討 - 名古屋大学ワーキンググループにおける取り組みを事例に」)。

という側面が強かった。しかし世界的に見れば日本を除く主要国では大学院の進学率は年々向上しており、それに呼応して各国の留学生市場もターゲットは学部生から大学院生へと徐々にシフトしつつある⁶。日本の大学の一研究科独自の努力で世界の留学生獲得競争に立ち向かえるような時代ではもはやなくなったのである。

そして大学院リクルーティングの強化のために考えられたのが、協定校を訪問し、模擬講義を提供することで本学の教育・研究水準の高さや多様性をアピールし、留学生の獲得を目指すという試みだった。模擬講義は「名大巡講」と名付けられ、平成26年度、平成27年度に中国と東南アジアの国々において実施された。本稿では大学院留学生獲得のための海外リクルーティングの実践例としてプロジェクトの概要を振り返るとともに、この経験を通じて得られた知見を今後のリクルーティングに対する提言としてまとめたい。

2. 名大巡講の概要とこれまでの活動

名古屋大学巡講（名大巡講、英語名：Nagoya University Visiting Lecture Series）は本学の協定大学などで開催する名古屋大学教員による大学院授業の模擬講義である。平成26年度から活動を開始し、これまでに中国、インドネシア、タイ、ベトナムの4か国、計16大学で開催してきた（そのうち14大学が全学間協定校で、1校が部局間協定校、残り1校が開催当時は協定未締結だったが後に全学間協定を締結することになった）⁷。模擬講義の提供を通じて、協定校の学生の間で名古屋大学の認知度を高め、ひいては大学としてのブランド力を強化することを第一の目的としている。さらに、大学院の専門教育の面白さや自分の専門分野を極めることの大切さを参加学生に伝え、大学院で学びたいという意欲を高めること、つまりは大学院への進学、大学院留学の需要の掘り起こしも大きな目標の一つである。多くの参加者に興味を持ってもらえるように、講義テーマは人文学、社会科学、工学、理学、環境学などの幅広い分野から選定している。以下に過去の講義テーマの一例をあげる（和文タイトルの講義は日本語で、英文タイトルの講義は英語にて実施した）。

- 「グローバル化と人口移動」

⁶ 例えばアメリカに留学している中国人留学生のうち、大学院（graduate）に在籍する留学生数は学部（undergraduate）に在籍する留学生数とほぼ同程度にまで増えつつある。また同じくインド人留学生では大学院の在籍者数が学部在籍者の5倍にまで膨れ上がっている。明らかに中国、インドというアメリカ留学の主要な送り出し国では、留学目的が学士号取得から修士号以上の学位取得へとシフトしつつある。Open Doors Data, *International Students: Academic Level and Place of Origin 2014/2015*, Institute of International Education, <http://www.iie.org/Research-and-Publications/Open-Doors/Data/International-Students/By-Academic-Level-and-Place-of-Origin/2014-15>（2016年5月25日閲覧）

⁷ 平成26年度の活動の詳細については伊東章子（2015）を参照のこと。平成27年度の活動報告も2016年に発行予定の同紀要第3号に掲載予定である。

- 「鉄道網の発達と日本の近代化」
- 「国宝源氏物語からみる源氏物語と名古屋」
- ‘Low Temperature Physics and its Application’
- ‘Embedded Computing Systems for Energy Conservation’
- ‘The Innovative Factors in Complex Technologies’
- ‘Combination of Microorganisms and Functional Materials for Remediation of Contaminated Soil and Water’
- ‘Physics Made Easy: Stellar Physics as an Example’
- ‘Inventive Problem Solving Approach to Disaster Risk Reduction’

講義テーマの選定については、多くの学生が関心を持ちやすい分野はもちろんのこと、訪問協定校のカリキュラムではあまり取り上げられていない研究分野もなるべく紹介するようにしている。大学院リクルーティングが目的であるので、未知の学問分野に接し、「この分野を学ぶためには留学する必要がある」、「この分野を極めるために海外の大学院へ進学したい」と思わせることが狙いである。講義のスタイルはレクチャー形式をとる場合もあれば、よりインタラクティブな形式をとる場合もある（ただし、国や大学によっては学生がインタラクティブな授業形式に全く慣れていないこともあり、その場合学生の反応が鈍くなってしまいう傾向にある。訪問国の大学教育の状況などを確認した上で授業の形式を判断する必要がある）。

講義の後には毎回留学説明会を実施して、名古屋大学や各研究科のカリキュラムの紹介や研究生・大学院の募集手続きについて説明を行うとともに、「指導教員はどうやって探すのか」、「研究生と大学院生の違いは？」などの大学院留学に関して留学生在が疑問に思う事項についてもわかりやすく解説している。また時間の許す限り個別の相談にも応じている。講義に引き続き説明会を実施することで、講義に参加して名古屋大学や大学院進学に関心を持ってくれた参加学生に対して、その場でフォローアップを行える体制を整えている。また講義と留学説明会だけではなく、協定校の国際交流担当者や日本語教育を行う学科の担当者、本学卒業生などとの意見交換を行う場もできるだけ設けるようにしている。協定校を訪問するせっかくの機会であるので、協定校関係者から相手校の日本留学の送り出し事情を聞き取るとともに、今後の協定校との関係強化についても協議している。

実施初年度（平成26年度）の全ての講義は、名古屋大学が各研究科に配置している国際化推進担当教員が担当した。国際化推進担当教員はそれぞれの研究科において研究・教育活動を行いながら、研究科の国際交流や留学生教育にも従事している。名大巡講の担当教員は専門分野に対する講義を行う

だけではなく、詳細な留学相談にも応じなければならない。また協定校関係者らと今後の学術交流活動についても話が進展することがある。国際化推進担当教員はこれら全てに対応が可能であり、名大巡講を担当するのに最も相応しい人材であるといえる（著者も国際化推進教員として名大巡講に参加している一人である）。次年度（平成27年度）からはより幅広い分野の講義を提供するために、国際交流業務に直接従事しない教員にも講義の提供を呼び掛け、参加を得るようになった。

名大巡講の実施にあたり、最も力をいれているのが中国である。これまで名大巡講を開催した協定校のうち2/3は中国の大学である。名古屋大学も例外ではなく、近年中国人留学生の数は年々微減し続けている。ベトナムやインドネシアなどの東南アジアからの留学生は増加しているものの、中国人留学生の減少をカバーできるほどには至っていない。特に私費留学生として大学院留学できるだけの経済的基盤を持つ学生を獲得したいと考えるのであれば、やはり中国での活動に注力せざるをえない。またリクルーティングにかかるコストの費用対効果の面から考えても、未だ中国が一番のマーケットであることは間違いない⁸。中国で十分な活動を展開したうえで東南アジア諸国のような留学生送り出しの新興国へも目配りするべきだろう。中国以外の対象国としては、本学での留学生の受け入れ実績、現地での高等教育機関における日本語学習者数、大学生の英語能力の高さ、本学海外事務所の有無などを踏まえ、これまでにインドネシア、ベトナム、タイの本学協定校において名大巡講を実施している。

名大巡講の対象を協定校に限定したのにはいくつか理由がある。大学院リクルーティングと言っても、留学説明会では交換留学プログラムなども紹介するために協定校の学生のみしか対象にできないといったプラクティカルな理由もあるが、それよりも重視したのは学生の「質」の問題である。中国を例にとりて考えてみると、中国には名古屋大学の全学間協定校が13校あり（除く香港）、その全てがいわゆる985工程大学と呼ばれるトップ大学である。また協定校13校のうちの11校は中国国内の大学ランキングの上位20位以内に入っている⁹。もし中国トップ大学である協定校からの留学生が増えれば、学生の「質」の向上が期待できる。しかし現実には、本学の協定校で学部を終えた学生が本学大学院に進学するケースが、過去に比べて非常に少なくなっていることが学内調査で判明した。協定校の学部終了者を本学大学院へ迎えることは、質量ともに安定した留学生を獲得するうえで喫緊の課題である。留学生のリクルーティングを論じる上で学生の質と量のバランスをいかに図るかは非常に難しい問題であり、ある程度の量が確保されなければ質の向上は望めないという考え方もある。しかし大学

⁸ 李（2016）がまとめた調査によると、1999年の中国政府による高等教育改革以降、中国国内の大学院進学者数が急増している。大学院進学者の中でも突出した伸びを見せているのが専門学位の修士課程であり、それが学術学位への進学率を抑える結果になってはいるものの、今後も修士号以上の学位の取得を希望する学部卒業生は拡大すると考えられる。李の考察は中国国内の大学院を対象にした分析であるが、中国人の海外大学院進学についても豊富な示唆を与えている。

⁹ ここでは中国校友会網による大学ランキングを参照した。中国校友会網「2016中国大学排行榜20強」<http://www.cuaa.net/cur/2016/>（2016年5月25日閲覧）

院のリクルーティングについては、留学生に求められる学力レベルや研究の素養・素質は厳密であることから、協定校の質の担保されている学生にターゲットを絞ることが有効であると判断した。

また一口に名大巡講と言っても実施形態は毎回まちまちである。受け入れ協定校の国際交流部署が学術講演会としてセッティングおよび学内周知をしてくれることもあれば、本学卒業生で協定校の教員になっている者や本学と研究交流実績のある教員がホスト役をかってくれて、所属学部や研究科のセミナーとして開催してくれることもある。日本語による講義については、日本語学科の授業として招かれることも多い。どの様な形にしろ、協定校の協力が得られなければ名大巡講は実施できない。日頃から名大巡講の取り組みを協定校関係者に周知し、協力をお願いするとともに、協定校関係者と綿密に相談してその時々で実施可能な形で講義を開催するような柔軟性をもつことも重要である（この点に関しては名古屋大学の在中国事務所である中国交流センターが大きく貢献してくれていることを付け加えておく）。

3. 参加学生の評価：アンケート結果より

上述したように、平成26年度と平成27年度の2年間で、4か国計16大学で名大巡講を開催し、これまで延べ1,400名の参加者があった。講義参加者の人数は毎回まちまちだが、少ない時で30、40名程度、多い時には180名ほどの学生が集まった。近年アジア人学生の旺盛な留学熱に注目する世界各国の大学や留学エージェントが、アジア各国、特に中国の大学を訪問して留学フェアなどを頻繁に開催している。しかしこのような留学フェアを開催しても、思ったよりも参加者が集まらずに苦戦することが多いと言う。名大巡講のこれまでの経験から言えば、協定校関係者からの協力もあり毎回十分な数の学生が集まってきている。また講義の後の流れでそのまま留学説明会を開催するので、学生が熱心に耳を傾けてくれる。こちら側から一方的に情報を提供するのではなく、大学院留学を主題にして参加学生と対話を行うことができるのが名大巡講の強みであると言える。

ここで参加学生の感想として、平成27年3月に中国で実施したアンケート調査の一部を紹介したい。アンケートは日本語による文系科目（人文学、社会科学）講義の参加者170名と、英語にて行った理系科目（工学、理学）講義の参加者230名に協力をお願いし、それぞれ133名（回答率78.2%）と160名（同69.6%）から回答を得た。講義使用言語によらず、アンケートは質問、回答ともに中国語で作成した。以下は日本語に翻訳して紹介する。

まずアンケートの冒頭で「講義に参加する前から名古屋大学のことを知っていましたか？」と尋ねたところ、文系講義参加者の100%、理系講義参加者の80.1%が「知っていた」と答えた。文系講義参加者の間の本学認知度が極めて高いのは、講義の参加者のほとんどが日本語学科専攻の学生たちであるからだと考えられる（理系講義参加者の場合、所属や専攻はまちまちである）。日本語学科の学生たちは教員や先輩学生に日本留学経験者が多く、日頃より名古屋大学を含めた日本の大学についての

情報に多く接している。そのため日本の大学全体に対する理解が、他の専攻の学生に比べて圧倒的に進んでいるものと思われる。興味深いのが理系参加者のうち、講義に参加するまで名古屋大学のことを「知らなかった」と答えた 19.9%の学生たちである。これらの学生は純粋に講義タイトルに惹かれて、自発的に名前も聞いたこともない日本の大学が開催する講義にやって来た層である（非常に研究意欲の高い学生たちだとも言える）。このような学生たちはもし本学が留学フェアを開催しても参加することはなかっただろう。学生が関心を持つ講義を提供することで初めて接点を持ちえたのである。この 19.9%の一人である学生はアンケートの自由記述の欄に「講義に参加して初めて名古屋大学のことを知った。講義が面白かったので、もっと名古屋大学について知りたいと思った。」と答えている。海外リクルーティングを実施するにあたり、大学の国際的知名度の高さはもちろん大きなアドバンテージになることは間違いないが、そればかりに左右されない学生たちがいることをこの例は示している。

次に講義に対する満足度を、「1. 非常に満足、2. 概ね満足、3. 普通、4. やや不満、5. 不満」の5段階評価で尋ねた。文系講義参加者からは「1. 非常に満足：19.8%」、「2. 概ね満足：67.7%」、「3. 普通 13.5%」の回答が、理系講義参加者からは「1. 非常に満足：8.8%」、「2. 概ね満足：79.3%」、「3. 普通 11.9%」の回答があった。両者とも「4. やや不満」と「5. 不満」と答えたものはいなかった。「1. 非常に満足」と「2. 概ね満足」を合計すると、文系講義、理系講義ともに 80%以上の参加学生が講義に満足してくれた結果となった。この評価を裏付けするように、自由記述欄には「英語で講義が聞けて、学ぶことが多かった」（理系講義）、「海外の大学の授業の進め方に興味を持った」（同）、「日本人の先生による専門の講義を初めて聞いた。とても勉強になった」（文系講義）、「今まで学んだことのない分野の話ばかりでもっと詳しく知りたいと思った」（同）などのコメントが寄せられた。名大巡講は模擬講義形式のリクルーティングであるので、学生に講義に満足してもらえるかどうかはいわば生命線である。講義を楽しんでくれた学生は名古屋大学についても肯定的に評価してくれるし、留学先の候補として検討することもあるだろう。しかし、反対に講義をつまらないと感じた学生は、名古屋大学そのものをつまらない大学と考える可能性が高い。

また「留学を考えていますか？」の問いには、文系講義参加者の83.5%、理系講義参加者の74.4%が「はい」と回答した。文系、理系講義ともに留学希望者の割合が非常に高く、事前の予想をはるかに上回った。実際に、講義後の留学説明会においても留学準備について具体的な質問をしてくる学生が目立った。一例をあげると、「(自分の学びたい分野を具体的にあげて)自分に適した研究科や専攻はどこか」、「指導をお願いしたい教員にコンタクトを取る場合、どのようなメールを送ると返事をもらいやすいか」、「大学院入試の際にGPAはどの程度重視されるのか」などの質問である。加えて、これはアンケートの設問にはなかったが、講義参加者と個別に話をした際に多かったのが、短期の交換プログラムなどで既に留学経験がある、もしくは参加が決まっていると話してくれた学生である。特に日

本語専攻の学生に突出して多く、短期留学経験者は一様にして大学院で再度日本に留学したいと話していた。意見交換を行った日本語専攻の教員からも同様の話題提供があり、学部の2年生次、3年生次に短期プログラムや交換留学で日本に行った学生が、それをきっかけに大学院進学を志すようになるという。近年多くの日本の大学がサマープログラムなどの短期プログラムを開催し、それを受け皿に留学生の受け入れの拡大を目指している(名古屋大学もようやく昨年度より2週間の短期日本語プログラムを始めた)。これからの大学院留学生の獲得戦略においては、既に短期で日本留学の経験のある学生たちに対して、いかに日本の大学院への進学を促すかも一つの焦点になるだろう。

さらに「留学を考えている」と答えた学生には、関心のある留学先も尋ねた。

表3：名大巡講の際に行ったアンケート調査の設問と回答（一部抜粋、原文は全て中国語）

設問：講義に参加する前から名古屋大学のことを知っていましたか？
文系：1. 知っていた 100%、2. 知らなかった 0%
理系：1. 知っていた 80.1%、2. 知らなかった 19.9%
設問：講義に参加してみてもいいですか？
文系：1. 非常に満足 19.8%、2. 概ね満足 67.7%、3. 普通 13.5%、4. やや不満 0%、5. 不満 0%
理系：1. 非常に満足 8.8%、2. 概ね満足 79.3%、3. 普通 11.9%、4. やや不満 0%、5. 不満 0%
設問：留学を考えていますか？
文系：1. はい 83.5%、いいえ 16.5%
理系：1. はい 74.4%、いいえ 25.6%
設問：下記選択肢の中で関心のある留学先はどこですか？（複数回答可）
日本、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、オーストラリア、韓国、シンガポール
文系：1. 日本 91%、2. アメリカ 23.4%、3. イギリス 17.1%、4. ドイツ 15.3%、5. 韓国 10.8%、6. カナダ、オーストラリア、シンガポール 9.9%
理系：1. 日本、アメリカ 61.3%、3. ドイツ 40.3%、4. イギリス 28.6%、5. オーストラリア 20.2%、6. シンガポール 19.3%、7. カナダ 16.8%（韓国は回答者なし）

* アンケートは平成27年3月に中国の協定校で開催した名大巡講の参加者を対象に行った。文系とは日本語で実施した文系分野の講義に参加した回答者（133名）を指し、理系とは英語で実施した理系分野の講義に参加した回答者（160名）を指す。アンケートには、上記以外にも留学先の選定理由や、留学情報の収集方法についての設問もあった。

文系回答者の中で留学先として日本を選択している者の割合が圧倒的に高いのは、これも回答者の

ほとんどが日本語専攻の学生だからであろう。次いでアメリカ、イギリスという留学先として人気の高い英語圏の国が続いている。近年中国人学生の間で留学先として人気の高い韓国と答えた学生も目立っている。一方の理系講義の参加者についても、アメリカと並んで日本を留学先に選んだ学生が多い。これは韓、河合（2012）が同じく985工程大学である浙江大学で行った調査結果と比べると、日本を留学希望先としてあげた学生の割合がはるかに高い結果となった¹⁰。本アンケート調査は名大巡講という日本の大学が開催する講義の参加者を対象に行ったため、潜在的に日本留学に関心のある学生が集まっていたと考えるのが妥当だろう。希望的観測を述べれば、日本留学に関心を持っていなかった学生が講義に参加したことで日本を留学先として候補にあげた結果とも考えられなくはないが、アンケートの回答からだけでは断言できない。いずれにせよ調査結果は、中国の有力大学の学生の間で潜在的な日本留学希望者は相当数いることを示している。名大巡講をきっかけに日本への留学、名古屋大学への留学に関心をもった学生を、いかに実際の出願まで導くのか、そのフォローアップ体制の確立が今後の課題として浮き彫りになった。

4. まとめ

本稿では大学院リクルーティングの新たな試みである名大巡講の概略をまとめた。名大巡講は開始してからたった2年足らずのプロジェクトであり、まだまだ改善すべき点が多い。またリクルーティングの評価にとって重要な効果についても十分な検証ができていない。それでも講義参加学生を対象に行ったアンケート調査からは、講義参加者に留学希望者が大勢含まれていること、講義への関心や満足度が名古屋大学への関心に結びつくことが読み取れた。これらの点から考えれば、大学院進学を希望する留学志願者へのアプローチとして、そして海外の大学院への進学需要を喚起するためのリクルーティング手段として、模擬講義の活用は有効であると言えよう。

また上述したように名大巡講は留学希望者だけではなく、協定校の国際交流担当者や日本語教育担当教員、卒業生、本学と研究交流実績を持つ研究者などと直接対話のできる貴重な機会でもある。このような機会を利用して得られた情報や浮かび上がった課題は、名古屋大学の留学生受け入れ政策全般にとって非常に有益な場合が多い。例えば、日本語教育担当教員から寄せられた「最近の学生は留学エージェントを使わなければ日本の有名大学に採用されないと信じている」という情報や、国際交流担当者からの「貴学に留学を希望する学生から相談を受けた時に、どのように情報収集を行うようにアドバイスをしたらよいのか」という照会は、リクルーティング活動を通じて留学に関心を持つ学生が増えたとしても、その学生が実際に出願へ至るまでには長い道のりが残されていることを物語っ

¹⁰ 韓らが2010年に浙江大学で行った調査によると、同大学の学生のうち留学を希望する国の第三希望までに日本をあげた学生は全体の17.4%で、調査対象の中ではアメリカ、イギリス、ドイツについて4番目だったという。1位のアメリカは浙江大学の87.6%の学生が留学希望先にあげている。

ている。リクルーティングの後に、アドミッション支援が確立されていなければ、数字として留学生の受け入れ拡大に結実することは難しい¹¹。今後は名大巡講の実施で得られた知識や経験を学内改革に活かす体制づくりを図り、大学院留学生の受け入れ拡大を目指していきたい。

<参考文献>

- ・伊東章子（2015）「模擬講義を中心とした海外リクルーティング」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』第2号

- ・韓立友、河合淳子（2012）「日本の大学における留学生受け入れ体制の問題点及び解決策の提示 - 京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論攷』第2号

- ・ライアン優子、袴田麻里（2015）「博士課程における外国人留学生の受け入れと支援 - 国立大学の理系を中心に - 」『ウェブマガジン留学交流』Vol. 57

- ・李敏（2016）「拡張路線にある中国の大学院教育の展開」、黄福涛、李敏編『中国における高等教育の変貌と動向 - 2005年以降の動きを中心に』広島大学高等教育研究開発センター

¹¹ 研究生または大学院生として入学を希望する留学志願者に対するワンストップ窓口を提供している京都大学アドミッション支援オフィスの試みは、大学院リクルーティングを考える上で参考にすべき点が多い。